[83]　吉田 都の『シンデレラ』

2005年7月16日　朝日新聞 夕刊

2005. 7. 16

舞踊

ロイヤル・バレエ団「シンデレラ」

隅々まで行き届いた演出

イギリスは自国の振付家と作品をとても大切にする国である。英国ロイヤル・バレエ団の6年ぶりの来日公演はアシュトンの「シンデレラ」とマクミランの「マノン」と、イギリスが誇る振付家の作品で二つのプログラムを組んだ。4人が交代で主演する「シンデレラ」から、在団10年になる吉田都の日を見た（12日、東京文化会館）。

アシュトン版は初演が48年。物語を手堅く舞踊化した作品だけに多少古びて見えてもしかたがないはずだが、この新制作版（03年）は隅々まで神経の行き届いた演出で、アシュトンの才気とユーモアにフレッシュな輝きを与えている。衣装も斬新で工夫が見えるが、節度があってじつに趣味がいい。

意地悪な姉たちが大活躍だ。初演では振付家自ら踊ったという役だが、今回は往年のスターで芸術監督も務めたアンソニー・ダウエルが大柄で出しゃばりの姉を、ウェイン・スリープが小柄な姉を演じて盛んに笑いを誘った。彼らのドレスも弾けてはいるが、とてもおしゃれだ。

吉田は精妙なステップでそよ風のように観客の心をなでる。シンプルで繊細なのに強い輝きがある。軽やかに華奢でいて完璧に安定している。都＝シンデレラのガラスの靴は、まさに彼女の踊りそのものだ。

王子のフェデリコ・ボネッリも、切れ味のいい動きとスタイルを感じさせるポーズで好印象を刻んだ。

全体にこれ見よがしのアクロバティックな動きが少ないなかで、道化（ホセ・マルティン）の機敏な跳躍と回転がひときわ鮮やかに宮廷場面を彩る。

品がよく奥行きのある舞台で、いかにもバレエらしい香り高い時間を堪能。カーテンコールでは客席が総立ちとなり、長く拍手が鳴りやまなかった。

（佐々木涼子・舞踊評論家）

吉田都のコケティッシュなシンデレラ＝瀬戸秀美氏撮影

写真に注目！

完璧なバランスで、見れば見るほど美しいポーズ。

見飽きない…。

ホームページ掲載　二〇二四年三月二三日